

帯広市男女共同参画セミナーレポート

「子供の笑顔が輝くまち ～女と男のより良い パートナーシップから～」



▽2016年9月17日(土)とかちプラザ視聴覚室にて、恵泉女学園大学学長の
大日向雅美さんに性別役割分担意識にとらわれない子育てや子育ての大切さにつ
いてお話しいただきました。

2015年は国連が誕生して70年、日本
が女子差別撤廃条約に批准して30年という
歴史的に特別な年でした。国連憲章では平
和の実現のために男女の性差別を含めたあ
らゆる差別の撤廃が必要だとされています。
男女共同参画のスタートは平和であり、
歴史的に見ると今は着実に良い方向へ進ん
でいる。しかし本当に良い時代だと言いき
れるのかというところはまだ課題が多いとい
う現状です。

「女性に立ちほだかる壁」

女性には人生において、いくつも壁があ
ります。結婚・子育て・介護とありますが、
社会に出た女性にまず立ちほだかる壁は就
職です。

雇用機会均等法が施行され、昔のように
女子学生が門前払いということはありません
でした。しかし、今も採用時は女性が多い
職場でも、年数が経つにつれて結婚や出産
子育てで辞めていってしまう女性が少なく
ありません。官公庁や大企業の実務職、大
学の教授職等の女性割合は10%以下です。
これは個人の問題以上に職場環境の問題が
大きいとされています。国際的に見ても、
これほど女性が高等教育を受けているのに
社会参画率が低い国はほとんどありません。
都市部では待機児童問題があり、子育てを
しながら働くという環境が整備されている
とは言えない現状があります。

「孤育て」を強いられる母親」

日本の長い歴史の中で、昭和の初めまで
は、母親は子どもを生んだら育児に専念す
るという考えはありませんでした。昔は大
家族の中や地域で子どもを育てるのが当
り前で、育児はお母さんだけの仕事ではな
かったのです。

戦後の高度経済成長を境に日本の産業構
造の変化や核家族化が進む中で、男性が働
いて女性が家庭を守るという体制がつくら
れ、子育ては女性の仕事という考えがだん
だんと広まりました。そして、女性が家事
育児を担っているのだから、子どもの教育



講師
大日向 雅美 さん
(おおひなた まさみ)

■プロフィール

2016年4月に恵泉女学園大
学学長に就任。1970年代初め
のコンロツーカー・ベビー事件以
来、40年余り母親の育児ストレス
や育児不安を研究。NPO法人
「あい・ぽーとステーション」代
表理事、子育てひろば「あい・ぽー
と」施設長として地域の子育て・
家族支援に取り組む。

は母親が全責任を担うべきだという母性観
が定着していったのです。この頃から母親
の育児不安や育児ノイローゼという現象が
はじまるようになりました。

今の子育てへの不安や母親の抱えるスト
レスは社会構造の問題です。
子育てが終わると介護もあります。夫の
親の介護は嫁がやるのが当然と思っている
家庭や地域もまだあります。

「子どもの笑顔が輝くために」

大切なのはお互いの人生に関心を持ち合
い、尊重し合うことです。男女共同参画と
いっても、何も家庭で男性と女性が全く同
じことをしなければいけないということでは
ありません。女だからこう、男だからこ
うと型にはめるのではなく、それぞれの生
活事情に応じた役割の分かち合い方があつ
てもいいのではないのでしょうか。家庭の中
で夫婦として互いに尊重し合う両親の姿を
見て、子どもたちは育っていきます。ひい
てはそれが子どもの人生をあるがままに受
け入れることにもつながっていくのだと思
います。

「老若男女共同参画で 新たな地域の創造を」



私が子育てをしていたとき、近所のおば
あさまにいろいろと助けていただきました。
好意に心から感謝しつつも恐縮する私に、
その方は「周りに上手に甘えることが大事
ですよ」「いずれゆとりができたら他の人を
助けてあげて」と言っ、「人生は支え&支
えられてお互いさま」の言葉を贈って下さ
いました。この言葉が、私の子育て支援活
動の基本となっています。